

研究通信

№134 追加

1983年9月 刊
村落社会学部
事 務 研究局
愛知大学文学部
社会学研究室
豊橋市町畑町1-1
0532 (45) 0441

第三十一回村研大会開催地の横顔(4)

大子町の産業あれこれ

九二の市町村を抱える茨城県は県北、鹿行、県南、県西と、大きく四つの地域に分けられますが、大会開催地の大子町はこのうち県北地域に位置しております。県北地域、ここには多賀山地、久慈山地、八溝山地という三つの山地が南北に連なっており、そのために山林・原野の比率は高く、この地域独特の自然条件が形作られています(ちなみに大子町の林野率は八〇%)。この環境は各町村のありように様々な影響を与えずにはおきません。現に、茨城県で過疎地域に指定されている大子町ほか一〇の市町村全てが県北地域に含まれます。地域産業の振興を、それを通して地域社会の活性化をどう図ってゆくか、県北地域にとって、そして大子町にとっても重い課題となっております。

一町八か村という県内でも例をみない広域合併によって誕生した大子町ですが、この町域を舞台にこれまで様々な産業が生まれ、そして消え

おわび

さきに「研究通信」(№134)をお送り致しましたが、事務局の編集上の不手際で大会開催地の横顔(4)を脱落いたしました。追加分をお送りいたしますので本誌に付加下さるようお願いいたします。

事務局

てゆきました。その代表的なものが馬産と木炭業です。

明治一八年に久慈産馬改良組合が設立され、品種改良に一層拍車がかげられるなかでこの地域の馬産の名声は次第に高まってゆきました。大子で開かれる定期せり市には県内のみならず全国から数多くの馬商が訪れ、とくに昭和一〇年代には一大産馬景気もたらされました。しかし第二次大戦後に、それも昭和三〇年以降に農業機械や化学肥料が普及するにつれて馬の需要は激減し、馬産は急速な衰退を余儀なくされます。また高度成長期におけるエネルギー革命の波を受けて同様な運命をたどるのが木炭業でした。

このように消えてゆく産業に代って新たに導入され、あるいは新たに台頭するのが和牛や豚であり、茶やりんごでした。現在、これらは農家経済を支える重要な部門に成長しております。その一端を、粗生産額にみる県下九二市町村中の順位で示してみましよう。昭和五五年、大子町は肉用牛、工芸農作物、茶、りんご等の各部門いずれも第一位といった具合です。

しかし、人口の流出に歯止めはかけられませんでした。とくに昭和四

○年代の流出が著しく、過疎の指定を受けるに至りました。以来、過疎対策が町政の重要な柱になっております。

「山間自立都市をめざして」との副題がついた「大子町総合計画」

(昭和五六年) なかに、つぎのような一節があります。「個別産業ごとの振興策を強力に推進するほか異種の地域産業間の複合的連携によりすそ野の広い関連産業を生み出し、また地域の潜在資源を有効利用することによって新しい産業を根付かせるための方策を重点的に展開する」、と。企業誘致による開発一本槍からの転換がうかがえて興味深く思われます。

現実には、この方向を具体化するような生産者の動きがいくつか芽生えつつあります。一例を御紹介しますと、ピーフステーキなど肉料理のつま野菜として用いられるクレソンの栽培がそれです。この作物には年間平均水温一五と二〇度の大量の清水が不可欠な条件ですが、山間地帯大子はその条件を具えていることに着目しての試みです。

この動きがどれ程の拡がりをみせながら実を結んでゆくか、それはまだわかりません。しかし既存の資源を見直し、そこから新しい生産物を開拓しようとする姿勢は注目し値すると思えます。

幾多の産業の消長を経験してきた大子町、そこには村落社会研究の素材が豊富にあります。このような大子での大会に多数の方々に参加されますよう、心からお待ちしております。

(斎藤典生会員)